The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	翻訳手順の「補償」：翻訳で失われたものを補うために
Author(s)	村上スミス，アンドリュー
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2023, 2022, p. 27-48
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91579
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

翻訳手順の「補償」
—翻訳で失われたものを補うために—

村上スミス・アンドリュー

0.　はじめに

伝統的な翻訳哲学や翻訳に関する一般的な言説では、二種類の翻訳方法が提唱されてきた。時代や提唱者によって呼び方が異なるが、つまり「直訳」と「意訳」に当たる訳し方である。これらは例えば、キケロの「直訳主義の解釈者のごとく」(“ut interpres”)と「演説者のごとく」(“ut orator”)、シュライアーマハーの「異化作用」(foreignizing)と「同化作用」(domesticating)の翻訳方法であり、テクスト全体の訳し方、あるいは翻訳者の翻訳に対する姿勢を示すものと考えられる。

一方、ミクロレベルの個々の語句や文に焦点を当て、原文（起点テクスト＝source text, ST）の表現がどのようにして訳文（目標テクスト＝target text, TT）として表れているかに着眼する「翻訳手順」（procedures）がある。ST と TT とで語の指示対象、品詞、語順、文法などが等しいか等しくないかで様々な手順を提唱し分類する理論である。この論文では、まず翻訳手順を概観して、手順の一つである「補償」(compensation)を詳しくみていき、文学作品の翻訳における補償の可能性について考える。

1.　翻訳手順について

伝統的な翻訳手順の分類として Vinay & Darbelnet (1958)がある。彼らはフランスの言語学者で、特に文体論が専門であり、語彙・文法の細かいところに着目した翻訳手順の分類を提唱した。翻訳の基本分類である「一般手順」といくつかの「韻律効果」がある。

1.1　翻訳の一般手順

まずは翻訳の「一般手順」を表１に示しておく。

翻訳手順	具体例
1. 借用 (loan)	（仏）bulldozer　（英）fuselage （日）コンピュータ　（日）コンプライアンス （英）manga　（英）anime
2. 語義借用 (calque)	（仏）Compliments de la Saison　（英）Governor General （日）11 年生　（日）よい週末を （英）Moon viewing　（英）Representative Director
3. 直訳 (literal translation)	（仏）L‘encre est sur la table. ↔ （英）The ink is on the table. （日）赤い風船 ↔ （英）red balloon （日）止まれ ↔ （英）Stop
4. 転位 (transposition)	（仏）Défense de fumer ↔ （英）No smoking （日）差出人 ↔ （英）From : （日）不合格だった ↔ （英）I failed
5. 調整 (modulation)	（仏）peu profond ↔ （英）shallow （日）満室 ↔ （英）No vacancies （日）年をとってきた私 ↔ （英）I, who am older now
6. 対応 (correspondence)	（仏）comme un chien dans un jeu de quills ↔ （英）like a bull in a china shop （日）猫に小判 ↔ （英）Pearls before swine （日）メートル ↔ （米）フィート
7. 適合 (adaptation)	（仏）Cyclisme ↔ （英）cricket ↔ （米）baseball （日）お帰りなさい ↔ （米）Hi! （日）夏祭り ↔ （米）Fourth-of-July fireworks

表１．Vinay & Darbelnet (1958)の一般手順

（Vinay & Darbelnet (1958); 英訳は Pym (2010); 例は Pym (2010)および筆者による）

Vinay & Darbelnet にとって望ましい翻訳とは、TT が目標言語 (target language＝TL) 文化において自然に読まれる、つまり「同化作用」の働く翻訳であった。例えばまずは「直訳」で訳し、自然な訳が得られない場合は表１の上方（起点言語 (source language = SL) 寄り）または下方（TL 寄

り）へ移動し、自然な訳が得られるまで手順を次々に試すことを想定していたようである。西欧言語、特にフランス語と英語を念頭においた分類のため、「直訳」の定義は厳密であり、ST と TT とで品詞・語数・語順・語義がすべて同一で初めて「直訳」と分類されるようである。翻訳において品詞が変われば「転位」、「視点」が変われば「調整」になるなどと説明されている。（転位と調整の見分けが難しく、さらに英語と日本語のようなかけ離れた言語同士では「直訳」が珍しく転位や調整が非常に多くなるなど、Vinay & Darbelnet の分類を研究に応用するときに考慮しなければならない点がある。）

表 1 のさらに下方へ移動すると ST の語や表現を TT では異なる語や表現に置き換える「対応」と「適合」がある。特に「適合」は SL 文化のものを TL 文化において同様の位置を占めるものに大胆に置き換える手順であり、議論が分かれる手順である。しかし、対応や適合と同じように「置き換える」手順である「補償」は Vinay & Darbelnet の分類において表 1 にある「一般手順」ではなく、「韻律効果」に分類される。

1.2 韻律効果

韻律効果	具体例
・拡大化 (amplification)	（英） “the charge against him” ＞ （仏） “l'accusation portée contre lui” [= the charge brought against him]
・縮小化 (reduction)	（仏）“Accès aux quais” [= access to the platforms] ＞（英）“To the trains”
・明示化 (explication)	（英） “queen of the South”（聖書ルカ伝）＞（日）「南の国の女王」 （英） “gun license” ＞ （露） “udostovereniye na pravo nosheniya oruzhiya” [= license for right to carry weapon]
・暗示化 (implication)	（仏） “étudiantes de l'école St. Mary” ＞（英） “students of St. Mary’s”
・一般化 (generalization)	（英）“mutton” [= 羊肉] ＞（仏）“mouton” [= 羊・羊肉] （日）「弟」＞（英）“brother”
・特定化 (particularization	（仏）“mouton” [= 羊・羊肉] ＞（英）“sheep” [= 羊] （英）“sister” ＞（日）「姉」
・補償 (compensation)	（以下に示す）

表２．Vinay & Darbelnet (1958)の韻律効果
（Vinay & Darbelnet (1958); 英訳は Pym (2010); 例は
Pym (2010)、ベイカー＆サルダーニャ (2013)および筆者による）

表 2 から分かるように、Vinay & Darbelnet の「韻律効果」は音韻とは無縁の文体的効果・レトリック的効果であるが、「韻律効果」というネーミングがやや謎めいていることが Pym (2016) に指摘されている(27)。しかし、下記 2.1.1 節で示す Vinay & Darbelnet の「補償」の定義が音楽メタファーを用いており、彼らは翻訳行為を楽譜（ST）の演奏（TT）に例えていたかも知れない。

いずれにしても、「補償」は語や表現を置き換えて ST と同様の効果を上げる翻訳手順であり、置き換えることにより品詞や視点が変わったら転位や調整、文化的な置き換えがある場合は対応や適合に当たるため、独立した「一般手順」と分類せず「韻律効果」に分類されたようである。

1.3 Pym (2016)の分類

Pym (2016) は Vinay & Darbelnet の分類およびその系譜を引き継いだ様々な翻訳手順分類、そして Vinay & Darbelnet と無縁の翻訳手順分類の系譜（ソビエト連邦や中国）を概観して、西欧言語のみならず世界の様々な言語に応用可能な翻訳手順分類を提唱する。日本語を例にとって Vinay & Darbelnet の分類の非西欧言語への応用の可能性を追究し、例えば「直訳」の Vinay & Darbelnet の狭隘な定義では、英和・和英翻訳は直訳が少なく転位や調整が極めて多くなると指摘する（190-191）。

しかし、「直訳」の定義を広げれば、直訳の概念が英和・和英翻訳にも応用可能だと言及する。つまり、直訳を “word-for-word” ではなく“chunk-for-chunk”（この場合の chunk は phrase に近い意味）と解釈すれば、英和・和英翻訳においても直訳はあり得ると考える。ただし、チャンクの順を変えることを可能とする。このような「chunk-for-chunk 直訳」の例を以下に示しておく。（Russell Scheinberg; Pym (2016) (191)による）

ST: Venice is built on a number of sand islands.
TT: ベネチアはたくさんの砂地の島の上に建っている。

Venice = ベネチア　　a number of = たくさんの
is built = 建っている　　sand islands = 砂地の島
on = の上に

Pym (2016) の翻訳手順分類を表３に示す。

Copying （模写）	Copying Words （語彙模写）	Copying Sounds（音声模写） Copying Morphology（語形模写） Copying Script（標記模写）…
	Copying Structure （構造模写）	Copying Prosodic Features（韻律要素模写） Copying Fixed Phrases（定型句模写） Copying Text Structure（テクスト構造模写）…
Expression Change （表現変更）	Perspective Change （視点変更）	Changing Sentence Focus（文の焦点を変更） Changing Semantic Focus（意味論的焦点を変更） Changing Voice（変種・代名詞変更）…
	Density Change （密度変更）	Generalization/Specification（拡大化・特定化） Explication/Implication（明示化・暗示化） Multiple Translation（多重翻訳・複数翻訳） Resegmentation（文構造変更）…
	Compensation （補償）	New Level of Expression（表現レベルを変更） New Place in Text（テクスト内箇所変更）…
	Cultural Correspondence （文化的対応）	Corresponding Idioms（対応する慣用句） Corresponding Culture-Specific Items（対応する文化固有物）…
Content Change （内容変更）	Text Tailoring （テクスト編集）	Correction/Censorship/Updating（修正・検閲・更新） Omission of Content（内容削除） Addition of Content（内容追加）…

表３．Pym (2016)の翻訳解決策分類（Pym (2016), 220; 日本語訳は筆者による）

ただし、Pym (2016) は「翻訳手順」(translation procedures)という用語を使わず “translation solutions” を採用している。翻訳過程において複数の訳し方が考えられる（「正」か「誤」のような二者択一ではない）場合を “translation problem”（翻訳問題）と呼び、翻訳者が選んだ訳し方を “translation solution”（翻訳解決策）と呼んだ。

表 3 右側のそれぞれの翻訳解決策の例を表 4 に示す。

翻訳解決策	具体例・説明
Copying Sounds（音声模写）	（英）“football” >（西）“fútbol”
Copying Morphology（語形模写）	（英）“skyscraper” >（西）“rascacielos” [=「空をひっかく」]
Copying Script（標記模写）	（英）“McDonald’s”を「マクドナルド」ではなく「McDonald’s」と表記する場合
Copying Prosodic Features （韻律要素模写）	（英）“The Price Is Right” >（独）“Der Preis ist heiβ” [= “The price is hot”]（韻を踏む）
Copying Fixed Phrases（定型句模写）	（日）「猫に小判」を “Gold coins for a cat”と訳す場合
Copying Text Structure （テクスト構造模写）	一文を一文で訳す、一段落を一段落で訳す場合
Changing Sentence Focus （文の焦点を変更）	（英）“I see Mt. Fuji” >（日）「富士山が見える」
Changing Semantic Focus （意味論的焦点を変更）	（英）“No vacancies” >（仏）“Complet” [= “Full”]
Changing Voice（変種・代名詞変更）	（西） “nuestra economía” >（英） “the Spanish economy”
Generalization/Specification （拡大化・特定化）	「スシローやくら寿司」> “conveyor-belt sushi restaurant chains”
Explication/Implication （明示化・暗示化）	「長い間端座の形を崩さずにいたので、努力しなければ立ち上がれなかった。」> “The long hours of unrelieved kneeling had **so paralyzed his legs** that he could pick himself up only with a special effort.”

Multiple Translation （多重翻訳・複数翻訳）	"*Gemeinde* (German unit of local government)"（複数の翻訳解決策を顕在的に用いること"visibly applying more than one translation solution"）
Resegmentation（文構造変更）	ST の長い文を TT では複数の短い文に分割することなど
Compensation: New Level of Expression（表現レベルを変更）	（仏）"On se tutoie..." [= "We can use the intimate second-person pronoun..."] >（英）"My friends call me Bill…"
Compensation: New Place in Text（テクスト内箇所変更）	脚注、文末注などのパラテキストを含む
Corresponding Idioms （対応する慣用句）	（日）「猫に小判」を "Pearls before swine"と訳す場合
Corresponding Culture-Specific Items （対応する文化固有物）	（仏）cyclisme ↔（英）cricket ↔（米）baseball
Correction/Censorship/Updating （修正・検閲・更新）	「北極がペンギン鳥を産み、印度が象を産み出す如く[略]」> "Just as the South Pole gives rise to penguins and India to elephants…"
Omission of Content（内容削除）	『一千一夜物語』の訳は 1,001 編の物語を含んでいない等、TT の目的に合わせて内容を省略すること
Addition of Content（内容追加）	説明、注釈、語録、訳者あとがき等を付け加えること

表４．Pym (2016)の翻訳解決策の具体例

（Pym (2016), 221-232; 例は Pym (2016)および筆者による）

表 4 にあるように、Pym (2016) は「補償」を二種類に分けており、下記４節で取り上げる Harvey (1995) の「補償」の細分化に似ている。

1.4 翻訳手順分類の意義

「補償」の定義や具体例を取り上げる前に、上述したような翻訳手順分類の意義について少し考えたい。まずは、このような分類は翻訳行為の認知的プロセスを把握するものではないと断っておきたい。つまり、「ヴィネイとダルベルネが比較しているのは、翻訳者がすると推定されるものの研究結果である［略］翻訳者が実際にどのように起点から目標へ辿り着くかという軌跡には一切基づいていない」(ピム (2010), 24)。また、マンデイ(2009)が指摘するように、「ヴィネイとダルベルネは翻訳の『プロセス』を記述しようとしたが、彼らのモデルは実際には翻訳の『産物』に焦点を合わせている」。(マンデイ(2009), 106)

しかし、上で触れたような翻訳手順分類は教育上・研究上の意義はあると考えられる。Pym (2016) は次のように、提唱した分類は翻訳行為の認知的プロセスの解明にはならないと認めた上で、教育上の意義に言及している。"The typology does not purport to describe the actual cognitive process of translating translators. It should be judged successful only when trainee translators and interpreters are able to grasp the terms and use them to extend their initial conceptions of the translator's task." (Pym (2016), 233)

Harvey (1995) も「補償」に限定してその教育上の意義について次のように主張する。"compensation is first and foremost a technique available to translators engaged in the *process* of transferring meanings and effects across linguistic boundaries. Hence, its importance in translation pedagogy is possibly greater than its significance as a descriptive category in translation criticism." (Harvey (1995), 66)

翻訳初心者は ST にあるものを全てそのまま翻訳する義務があると考えるようで、直訳しがちだが、いろいろの翻訳手順を学ぶことにより、ST の個々の単語や表現に固着することなく、翻訳のエンドユーザである TT 読者とのコミュニケーションを図るためには、様々な翻訳方法が可能であることを認識させる効果があると考えられる。

上記の Harvey (1995)よりの引用にあるような「翻訳批評における記述的カテゴリーとしての意義」など、研究上も一定の意義はあると考えられる。分類の線引きが難しいが、手順一つに焦点を当て厳密に定義すれば ST と TT との比較、複数の TT の比較検討に役立つと考えられる。また、翻訳手順分類は等価理論、翻訳シフトなどの翻訳研究の基本的理論と密接に関わっている。

2. 補償（compensation）について

2.1 「補償」の定義

まずは各研究者の「補償」の定義をみていく。

2.1.1 Vinay & Darbelnet (1958)の定義

> "Procedure whereby the tenor of the whole piece is maintained by playing, in a stylistic detour, the note that could not be played in the same way and in the same place as in the source."
> (Vinay & Darbelnet (1958); 英訳は Pym (2010)による）

> 「原典と同じ方法及び同じ個所で演奏できないような旋律を、迂回するようなスタイルで演奏することによって、楽曲全体の主旋律が維持されるような手段」
> (Vinay & Darbelnet (1958); 和訳は ピム (2010)による）

上記 1.2 節で触れたように、この定義では翻訳行為を音楽メタファーで捉えており、Vinay & Darbelnet のこのような考え方が「韻律効果」のネーミングにも影響したかも知れない。

Vinay & Darbelnet の定義では、「補償」がなされるところは「同じ個所」ではないことに注目したい。（Vinay & Darbelnet は同じ個所でなされる処理を他の翻訳手順として分類するであろう。）

2.1.2 Munday (2012)の定義

> "Translation does inevitably involve some loss, since it is impossible to preserve all the ST nuances of meaning and structure in the TL. However, ... a TT may make up for ('compensate') this by introducing a gain at the same or another point in the text." (Munday (2012), 89-90)

> 「起点テクストの意味や構成のすべてのニュアンスを目標テクストで維持することが不可能なので、翻訳は必然的に損失を伴う。しかし［略］目標テクストは損失があった個所または別の個所での付加により、補う（補償する）ことができる場合がある。」
> （和訳は筆者による）

Vinay & Darbelnet の「同じ個所でない」定義に対して、マンデイは「同じ個所または別の個所」でなされる処理を「補償」として定義する。

2.1.3 Harvey (1995)の定義

> "a technique for making up for the loss of a source text effect by recreating a similar effect in the target text through means that are specific to the target language and/or the target text."
> (Harvey (1995), 66)

> 「ST の効果が失われた際に、目標言語や TT に固有の手段を使って、ST と同様の効果を TT の中に再現して埋め合わせる技法」 （ベイカー＆サルダーニャ編 (2013), 244）

Harvey の定義は、「埋め合わせる」個所は特定すらしない定義になっている。

3. 補償の具体例（先行研究より）

次に先行研究が挙げる補償の具体例を示しておく。

> "French must choose between intimate and formal second-person pronouns (*tu* or *vous*); contemporary English cannot. To render the distinction... the translator might opt for a switch from the family name to the given name, or to a nickname, as in 'My friends call me Bill,' to render '*On se tutoie*...' (meaning, 'We can use the intimate second-person pronoun...')." (Pym (2010), 15-16)

> 「フランス語では、二人称単数で親称 'tu' か 敬称 'vous' を選ばなければならないが、現代英語ではそれはできない。この区別を訳出するために、[略] 'On se tutoie'（「私たちは君僕で話す」という意味）の訳として、'My friends call me Bill'のように翻訳者が名字をファーストネームあるいはニックネームに代える選択をするかもしれない。」
> （ピム (2010), 27）

Munday (2012) も同じフランス語人称代名詞を例に取り上げ、異なる対処法を提示する。

> "One example is the translation of dialogue: if the SL is a t/v language and shows a switch from formal to informal address (...French *vous* to *tu*), English will need to find a compensatory way of rendering this, perhaps by switching from the use of the character's given name (e.g. Professor Newmark > Peter)." (Munday (2012), 90)

日本語の人称代名詞は親称／敬称の二通りのみならず様々なバリエーションがあり、和英・英和翻訳の場合は Pym の例にあるような工夫が翻訳者に求められる。Hasegawa (2012)もこのようなことを取り上げて補償について説明している。

> "When some information is lost in one place in a translation, it can be compensated for at some other place. For example, a Japanese utterance using the addressee's name with *-chan* might be rendered in English by an informal speech style and/or the use of a nickname."
> (Hasegawa (2012), 180)

上記の Pym (2010)、Munday (2012)、Hasegawa (2012) の具体例はいずれも「補償」を説明するためのものであるけれど、次に、実際の翻訳において補償を検証する Harvey (1995)より、補償の具体例をいくつか取り上げる。

> "*'Suivez mes Thraces! Suivez mes Thraces!'*
> (Literally: 'Follow my Thracians! Follow my Thracians!,' with a pun on the expression *suivez mes traces*, or follow in my footsteps.)
> The target text translates this by using its own pun:
> 'Heavy-duty nimble Hoplites!'
> The humorous effect of the source text is lost and then recreated by different means in the target text (Hoplites and its homophone lights contrasting paradoxically with Heavy-duty)."
> (Harvey (1995), 67)

この例について、ST（漫画の『アステリックス』）ではフランス語の *Thraces* と *traces* の音の近さに拠るダジャレの効果を、TT では重い (Heavy[-duty])／軽い (Hoplite [=light]) のコントラストによる効果に置き替えていると説明されている。（さらに言えば、TT にある "nimble"（敏捷な）が "hop"（跳ぶ）とともに軽いイメージに貢献していると思われる。）

> "'*Aber mit seiner Chaussure, hore mal, da steht es scheusslich*.'
> (Literally: 'But with his shoe, listen, there it stands hideously.')
> '*Maar zijn schoeisel, zeg, dat is affreus.*'
> The French word '*Chaussure'* makes this sentence sound pretentious.
> In Dutch the word '*chaussure'* for shoes, footwear, is never used, not even by the most affectedly speaking people. The Dutch translator has therefore opted for the more neutral '*schoeisel'* (footwear) and has inserted the French element elsewhere in the sentence by translating '*scheusslich'* (awful) by '*affreus'*, a French word (*affreux* = hideous) which is used in Dutch and does have the affectedness that is called for by the SL text..."
> (Langeveld (1988), quoted in Harvey (1995), 80)

この例では、ST（ドイツ語）が「靴」に当たるフランス語（からの借用語）を会話に取り入れることにより、気取った、上品ぶった雰囲気を出しているが、TL であるオランダ語では、「靴」のフランス語をどんな気取った人でも会話に用いないため、代わりに借用語として使用可能な「ひどく醜い」に当たるフランス語を会話に用い、ST 同様の気取った、上品ぶった雰囲気を出している、と説明されている。

4. Harvey (1995)の記述的枠組み

Harvey (1995) は上記 1.4 節で触れたように、補償の教育上の意義を指摘している。それまでの

翻訳研究では「補償」が厳密に定義されず（“poorly defined”）、実際のテクストからの具体例が少ないと指摘し、“compensation is the procedure which in the last resort ensures that translation is possible”（「補償は翻訳が最終的に可能であることを担保する手順である」）との Peter Newmark の言葉を引用して補償の重要性を訴え、補償の記述的枠組み（descriptive framework）を提唱する。

Harvey (1995)はまず “...one of the central problems we face is establishing what does or does not count as an instance of compensation” (77)と、補償の判別の問題について言及する。「直訳から逸脱する翻訳手順」（“non-literal translation procedures”）がすべて補償であるということは勿論なく、「単なる文法的転位の例」（“straightforward instances of grammatical transposition”）や対応する単語の欠如による言い換え、さらには「文化的置き換え」（“cultural substitution” = Vinay & Darbelnet の「適合」）と補償との区別が重要であると指摘する。

このような補償の区別の問題が補償の記述的枠組みが捉えなければならない問題の一つであり、もう一つは ST と TT の関連する個所の対応関係に関する問題である。Harvey が提唱する記述的枠組み（descriptive framework）は以下の三つの軸で補償を捉えようとする。(Harvey (1995), 78)

(1) 類型論的軸（typological axis）- 補償かどうかを決定する基準に関わる
(2) 対応的軸（correspondence axis）- ST の言語手段と TT の言語手段の対応関係に関わる
(3) 位置的軸（topographical axis）- ST の損失のあった個所と TT の補償の個所との距離に関わる

類型論的軸について、Harvey は以下の二種類の補償を提唱する。 (78)

(1-1) 「文体的補償」（stylistic compensation）とは、補償の効果が ST・TT のテクスト特有のもので、そのテクストの文体・雰囲気・変種へ独自的に貢献する場合である。
(1-2) 「文体・体系的補償」（stylistic-systemic compensation）とは、補償の効果が SL・TL の習慣化された言語体系的資源を用いている場合である。

対応的軸で、ST と TT がそれぞれ用いる言語手段について、以下の三種類の対応関係があるという。(79-81)

(2-1) 直接的対応 (direct correspondence) とは、ST で効果を上げるのに用いられた言語的工夫と同類の言語的工夫が TT でも用いられている場合である。
(2-2) 類推的対応 (analogical correspondence) とは、ST が用いた工夫と TT の用いた工夫は同類ではないが、同じ言語的レパートリーを用いる場合である。
(2-3) 非対応 (non-correspondence) とは、ST の用いた工夫と TT の用いた工夫とでは言語的な共通性がない場合である。

そして位置的軸では、ST が効果を上げている個所と TT が効果を上げている個所との関係について三種類の位置関係がある。(82-84)

(3-1) 並列関係（parallel relationship）- ST と TT とで、効果が上がる個所は同一である場合（“the compensation occurs at exactly the same place in the target text as the effect that has been lost in the source text.”）(Harvey (1995), 82)
(3-2) 近接関係（contiguous relationship）- ST において効果が上がる個所と TT において効果の上がる個所が近接している場合（“the compensation occurs in the target text within a short distance from the lost effect of the source text.”）(Harvey (1995), 82)
(3-3) 遠隔関係（displaced relationship）- ST において効果が上がる個所と TT において効果の上がる個所との距離が長い場合（“the instance of compensation in the target text is a long distance from the source text loss.”）(Harvey (1995), 83)
(3-4) 一般化補償（generalized compensation）- TT には ST とほぼ同じ数量・質の効果を目的とする文体的工夫が含まれるが、それらが ST の特定の損失個所と結びつかない場合（“the target text includes stylistic features ... that aim to achieve a comparable number and quality of effects, without these being tied to any specific instances of source text loss.”）(Harvey (1995), 84)

補償は翻訳者の自由と創造性を増す翻訳手順であるが、Harvey (1995) が提唱する「一般化補償」が特に翻訳者の創造性を解放してくれると考えられる。下記 6 節で取り上げることにする。

5. 補償の具体例の検証（文学作品の翻訳より）

次に文学作品の翻訳における補償の具体例を取り上げて検証する。5.1 節では英米文学作品の日本語訳より例を取り上げ、5.2 節では日本文学作品の英訳より例を取り上げる。

5.1 補償の具体例の検証（英米文学作品の日本語訳より）

5.1.1 Raymond Chandler, *The Long Goodbye* の日本語訳

【原文】
“The valley had a thick layer of smog nuzzling down on it. ...
‘My God, I thought Southern California had a climate,’ he said. ‘What are they doing, burning old truck tires?’
‘It’ll be all right in Idle Valley,’ I told him soothingly. ‘They get an ocean breeze in there.’
‘I’m glad they get something besides drunk,’ he said.” (Chandler (1953/1992), 296)

この例では、話者 B が話者 A が用いた“get”を繰り返すことにより、ちょっとした言葉遊びを会話に取り入れている。よって、談話における結束性がうまれる。些細の効果ではあるけれど、できれば工夫して TT にも同様の効果がでるように訳したいところである。

【清水訳】
「スモッグがそのへん一帯におおいかぶさっていた。［略］
『まったく驚きましたね。私は南カリフォルニアは気候のいいところと聞いていた』と、彼はいった。『いったい、どうしようというんでしょう――トラックのタイヤを焼こうというんですか』
『アイドル・ヴァレーはこんなに暑くはないんです』と、私は彼を慰めていった。『海から風が吹いてくるんです』
『酔っぱらいだけでなく、風も吹くんですか』と、彼はいった。」
（チャンドラー『長いお別れ』清水俊二訳、411）

【田口訳】
「スモッグがぶ厚い層となってヴァレーにその鼻先を突っ込んでいた。［略］
『まったく。南カリフォルニアというのは気候がいいところだと思っていたよ。いったい何をしてるんだ？誰かがトラックの古タイヤでも燃やしてるのか？』
『アイドル・ヴァレーにはいればスモッグはなくなる』と私は彼をなだめて言った。『あそこは海風がふくから』
『アイドル・ヴァレーには酔っぱらいがいるだけじゃなくて、ほかにも何かあることがわかって嬉しいかぎりだ』と彼は言った。」 （チャンドラー『長い別れ』田口俊樹訳、448）

【村上訳】
「ヴァレーには、まるで鼻先を地面につけるみたいにスモッグが重く厚く垂れ込めていた。［略］
『なんてことだ。南カリフォルニアは気候がいいというのが通り相場じゃないか』と彼は言った。
『いったい何が起こっている？古タイヤでも燃やしているのかね？』
『アイドル・ヴァレーは問題ありません』と私は宥めた。『あそこは海風に恵まれていますから』
『酔っぱらい以外にも恵まれたものがあそこにあるとわかってなによりだ』と彼は言った。」
（チャンドラー『ロング・グッドバイ』村上春樹訳、411）

清水訳、田口訳とも“get”の繰り返しを無視し、意味のみを訳している。これらに対して、村上訳では「恵まれて」「恵まれた」と訳すことにより ST 同様、談話の結束性を実現していると言える。

5.1.2 Lewis Carroll, *Alice's Adventures in Wonderland* の日本語訳より

Lewis Carroll の *Alice's Adventures in Wonderland* や *Through the Looking-Glass* は、周知のとおり、様々なダジャレや言葉遊びを含んでおり、日本語へ訳すとき、同様の効果を上げようと努めるなら工夫が必要になる。第 9 章 The Mock Turtle's Story と第 10 章 The Lobster-Quadrille より例をいくつか挙げて、四通りの和訳での翻訳の仕方をみていく。

5.1.2.1 "We called him Tortoise because he taught us"

"'When we were little,' the Mock Turtle went on... 'we went to school in the sea. The master was an old Turtle -- we used to call him Tortoise ---'
'Why did you call him Tortoise, if he wasn't one?' Alice asked.
'We called him Tortoise because he taught us,' said the Mock Turtle angrily. 'Really you are very dull!'"
(Lewis Carroll, *Alice's Adventures in Wonderland*, 83)

これはイギリス英語の発音が根拠にあるダジャレである。稲木・沖田 (2015) によると「イギリス英語の方言では、母音の後の r 音は、その後に子音が続くとき発音されないので、[tɔ:təs]と発音される。これは丁度 taught us を発音するのと同じになる。」（稲木・沖田 (2015), 146）

【田中訳】
「『わたしたちが子どもの時分には、』と、にせ海ガメはとうとうつづきを話しだしました。［略］『海の底の学校へいったものです。先生は年よりの海ガメで—わたしたちは正覚坊（しょうがくぼう）先生（正覚坊は海ガメの一種）と言っていました。』
『正覚坊じゃないのに、なぜそう言うの？』と、アリスがたずねました。
『小学校の先生だから正覚坊先生と言ったんだよ。』と、にせ海ガメは怒って言いました。『ほんとうにおまえさんは頭がにぶいね。』」　（『ふしぎの国のアリス』田中俊夫訳、153）

【柳瀬訳】
「『わしらが子供の時分は』と、海亀フーがやっと先をつづけた。［略］『海んなかで学校へ通ったもんだ。先生は年寄の海亀だったが——みんなして地亀（ちかめ）先生と呼んどったよ——』
『どうして地亀先生なの、海亀なのに？』アリスは尋ねた。
『先生ってのは、たいてい近目（ちかめ）に決まっとるじゃないか』海亀フーは怒ったようにいった。『まったくもって鈍い子じゃな！』」　（『不思議の国のアリス』柳瀬尚紀訳、133）

【矢川訳】
「『ぼくたち、子供の頃には、海の中の学校へかよってたんだ』ウミガメモドキはやっとまたしゃべりだした。［略］『先生は年とったウミガメだったけど、ぼくたちゼニガメってよんでた』
『どうしてゼニガメなんてよんだの、ほんとうはそうじゃないのに』アリスが口をだす。
『だってぜにかねとって勉強教えるじゃないか』ウミガメモドキはぷりぷりして、『まったくもう、なんてとろいんだ！』」　（『不思議の国のアリス』矢川澄子訳、131）

【河合訳】
「『小さかったころ、』ついに海ガメもどきが［略］続けました。『海の学校に通っていたんだ。先生は年寄りの海ガメだったけど、茶々（ちゃちゃ）と呼ばれていた—』
『どうして海ガメなのに茶々と呼ばれていたの？』アリスはたずねました。
『先生はティーチャだろ。ティーとは茶のことだ。だから茶々じゃないか。』海ガメもどきは怒って言いました。『まったく君はにぶいなあ！』」　（『不思議の国のアリス』河合祥一郎訳、128）

四通りの日本語訳がそれぞれ工夫して何とか面白おかしく訳そうとしているが、どれも ST が効果を上げていたのと同じ個所で効果を上げようとしていることに注目したい。Vinay & Darbelnet（上記 2.1.1 節参照）等、伝統的な「補償」の定義が定める、ST と「同じでない個所」よりも、Munday (2012)や Harvey (1995) など、効果を上げる個所を限定しない定義がこの例では翻訳の実

情に合っていると考えられる。
　河合訳の訳し方がやや飛躍するように思われるかも知れないが、下記６節で触れるように、上記引用の後続する部分では更なる工夫がある。

5.1.2.2 “That’s the reason they're called lessons: because they lessen from day to day.”

“‘And how many hours a day did you do lessons?’ said Alice...
‘Ten hours the first day,’ said the Mock Turtle: ‘nine the next, and so on.’
‘What a curious plan!’ exclaimed Alice.
‘That’s the reason they're called lessons,’ the Gryphon remarked: ‘because they lessen from day to day.’”
(Carroll, *Alice’s Adventures in Wonderland*, 85)

　これは“lesson”と“lessen”の発音が同一もしくは近似していることに拠るダジャレである。

【田中訳】
「『で、毎日おけいこは、いく時間あったの？』アリスは、いそいで話題を変えようとして言いました。
『最初の日は十時間。』と、にせ海ガメが言いました。『つぎの日は九時間、といったやり方さ。』
『ずいぶんきみょうなやり方なのね。』と、アリスはさけびました。
『一日一日少なくなっていくからね、だから少学校と言うんだよ。』とグリフォンが説明しました。」
（『ふしぎの国のアリス』田中俊夫訳、158-159）

【柳瀬訳】
「『それで、一日に何時限あったんですか？』アリスは急いで話題を変えた。
『最初の日は十時限』海亀フーがいった。『あくる日は九時限、そんなぐあいに減っていく』
『変わった時間割だこと！』アリスはいった。
『だからこそ時限というんだろ』グリフォンがいった。『毎日、時間が減（げん）ずるから時減（じげん）というわけだ』」　（『不思議の国のアリス』柳瀬尚紀訳、136）

【矢川訳】
「アリスは話題をかえようと、おおいそぎで、
『授業は一日何時間？』
『はじめの日は十時間、つぎの日は九時間って、だんだんへってくの』
『へんな時間割！』アリスが思わずいうと、
『そりゃお勉強だもの、少しずつおまけしますってわけさ』とグリフォンの説明だ。」
（『不思議の国のアリス』矢川澄子訳、135）

【河合訳】
「『それで、毎日何時間の授業があったの？』急いで話題を変えようとしてアリスは言いました。
『最初の日は十時間』と海ガメもどき。『次の日は九時間、といった具合さ。』
『へんてこりんな時間割ね！』アリスはさけびました。
『だから、時間割っていうんじゃないか。』グリフォンが言いました。『なんとか割（わり）っていうのは、少し減らしてくれることをいうんだよ。』」
（『不思議の国のアリス』河合祥一郎訳、132）

　この例でもそれぞれの和訳が工夫して訳しているが、矢川訳は「勉強」＝「利益を無視して、商品を安く売ること」（新明解国語辞典）という表現を用いた工夫である。

5.1.2.3 “No wise fish would go anywhere without a porpoise”

“‘No wise fish would go anywhere without a porpoise.’
‘Wouldn’t it, really?’ said Alice, in a tone of great surprise.

‘Of course not,’ said the Mock Turtle. ‘Why, if a fish came to *me*, and told me he was going on a journey, I should say ‘With what porpoise?’
‘Don't you mean “purpose”?’ said Alice.
‘I mean what I say,’ the Mock Turtle replied, in an offended tone.”
(Carroll, *Alice’s Adventures in Wonderland*, 90-91)

この例でも、“porpoise”と“purpose”の発音の類似をベースにしたダジャレである。

【田中訳】
「『りこうな魚はみな、どこへいくにもイルカを連れていくんだ。』
『まあ、ほんとう？』アリスは、たいへんびっくりしたように言いました。
『もちろんさ。だって、もし魚がわたしのところへ来て、これから旅行に出かけますと言うときには、わたしは、「おともはイルカ」と言うからね。』
『「おともは居るか」という意味じゃないの？』
『今言った通りだよ。』にせ海ガメが怒ったように言いました。」
（『ふしぎの国のアリス』田中俊夫訳、169）

【柳瀬訳】
「『賢い魚なら海豚を連れずにはどこへもいかんね』
『えっ、ほんとうに？』アリスはとても驚いた調子でいった。
『もちろんだとも』海亀フーはいった。『よいかな、もしどこかの魚がわしのところへやってきて、これから旅に出るといったなら、わしはこういう。「どこの海豚？」とな』
『「どこにいるか」でしょ？』アリスはいった。
『わしのいうことにけちをつけるのか』海亀フーは機嫌をそこねた口調で答えた。」
（『不思議の国のアリス』柳瀬尚紀訳、145）

【矢川訳】
「『かしこい魚はイルカなしじゃあどこへも行かないぜ』
『ええっ、ほんとう？』アリスはびっくり仰天だ。
『そりゃそうだよ。なんか魚がぼくんとこへきて、これから旅にでますっていったらば、ぼくとしちゃ、〈どこイルカ〉ってきくやねえ。』
『〈どこ行くか〉ってことじゃない？』とアリス。
『ぼくのいったとおりだって』ウミガメモドキはむっとしたらしい。」
（『不思議の国のアリス』矢川澄子訳、143）

【河合訳】
「『かしこい魚なら、イルカなしにどこにも行きゃしないよ。』
『本当？』アリスはたいへんおどろいた口調で言いました。
『もちろんさ』と海ガメもどき。『だって、もしどこかの魚が来て、旅に出るって言ったら、「どちらの、まぁ、イルカちゃんと？」って聞くもの。』
『そうなの？』
『「どちらのぅ、まぁいるか」ってちゃんと。』
『ひょっとして、「どちらへまいるか？」ってちゃんと聞くってこと？』
『今言ったとおりの意味です。』海ガメもどきはむっとして答えました。」
（『不思議の国のアリス』河合祥一郎訳、139）

この例では、田中訳の工夫は表記（カタカナ・漢字）に拠るもので、登場人物が会話をしていることを考慮すればやや不適切な訳し方と考えられる。また、河合訳の工夫ではやや理解しにくく、問題の表現「どちらのぅ、まぁいるか」ST よりも一回多く繰り返している。なお、稲木・沖田 (2015)が ST のこのダジャレを説明するために用いられる日本語訳は簡潔で分かりやすいため、ここに提示しておく。

【稲木・沖田訳】
「『魚が私のところへ来て、旅に出ると言ってきたら「用がイルカ」と聞くもの』。
思わずアリスが『それを言うなら、「用があるか」じゃないの』と、［略］突っ込みを入れる［略］」
（稲木・沖田 (2015)、156）

5.1.2.4 海の学校の授業科目

Alice's Adventures in Wonderland 第 9 章 The Mock Turtle's Story はダジャレ・言葉遊びが特に多い箇所であり、中でもニセ海亀が通ったという「海の学校」の授業科目名がすべてダジャレで、圧巻である。表５の１列目に示す科目名がどれもイギリスの学校の科目名をもじっており、それぞれの和訳の訳し方が表５に示すとおりである。

海の学校	イギリスの学校	田中訳	柳瀬訳	矢川訳	河合訳
(1) Reeling	Reading（読み方）	よろけ方	海用感字の読み方	酔いかた	もみ肩（かた）
(2) Writhing	Writing（書き方）	もがき方	海用感字の書き方	掻き方	掻（か）き肩（かた）
(3) Ambition	Addition（足し算）	大志算（だいしざん）	海程式（かいていしき）	大志（タシ）算	めでたし算
(4) Distraction	Subtraction（引き算）	変気算（へんきざん）	釣亀算（つりかめざん）	贔屓（ヒキ）算	かぜひき算
(5) Uglification	Multiplication（掛け算）	美欠算（びかけざん）	因数分海	見せカケ算	かびかび ぶっかけ算
(6) Derision	Division（割り算）	笑い算	侮数計算（ぶすうけいさん）	よワリ算	わりぃわりぃ算
(7) Mystery	History（歴史）	溺死	礫史（れきし）	霊奇史	おせっかい史
(8) Seaography	Geography（地理）	水理	海理学	汐理学（シオグラフィ）	海理（かいり）
(9) Drawling	Drawing（線描画）	のろのろ体操	貝画（かいが）	海画 衰彩画	デッぷり おっサン
(10) Stretching	Sketching（写生画）	あくびの仕方	蛤作（こうさく）	遊彩画	写（しゃ）らく 生（せい）
(11) Fainting in Coils	Painting in Oils（油彩画）	とぐろを巻いて気絶する方法	捻努細工（ねんどざいく）	腺病画（センビョウガ）	天ぷら油絵
(12) Laughing	Latin（ラテン語）	へそで茶をわかす法	悲事記（ひじき）や 万陽集（まんようしゅう）	楽天（ラテン）語	チンプン漢文
(13) Grief	Greek（ギリシャ語）	べそのかき方		義理者（ギリシャ）語	

表５．海の学校の教科の訳し方
（Carroll (1865/1998) 85、Carroll (1865/1998) 317、キャロル(1955/1985) 156-158、キャロル(1987) 135-136、キャロル(1994) 134-135、キャロル(2010) 130-132 による）

日本語訳には、ST の海や海洋生物の動き方に関連するネーミングに倣って日本語訳を作成したものもあれば、独自の発想で訳しているものもある。特に柳瀬訳や河合訳では国語や日本史を意識した工夫が施されている。また、河合訳の (8) Seaography を「地理」に倣って「海理」と訳したのち、「先生は海狸（かいり）、つまりビーバーだった」と続き、上記 5.2.1.2 節でみたように、テクスト全体を面白おかしく訳す努力が感じられる。

5.2 補償の具体例の検証（日本文学作品の英訳より）

次に日本文学作品の英訳より例を取り上げて検証する。

5.2.1 永井荷風『墨東綺譚』の英訳より

5.2.1.1 候文と東京下町言葉

「［略］虫干しをしていた物の中に、柳橋の妓（ぎ）にして、向嶋小梅の里に囲われていた女の古

い手紙を見た。手紙には必ず候文（そうろうぶん）を用いなければならなかった時代なので、その頃の女は硯を引き寄せて筆を秉れば（とれば）、文字を知らなくとも、おのずから候べく候の調子を思い出したものらしい。［略］
文中『ひき移り』を『しき移り』となし、『ひる前』を『しる前』に書き誤っているのは東京下町言葉の訛りである。」　（永井荷風『墨東綺譚』80-81）

この例では「候文」と「東京下町言葉」という、それぞれ書き言葉と話し言葉の日本語の変種を指し示す語の訳し方に着目したい。

【Anderson 訳】
"... when airing out my books, I'd come across an old letter from a geisha trained at Yanagibashi. She was in Koume then. Those were times when a certain degree of formality was expected in a letter, and despite perhaps not always knowing proper spellings, when she took up brush and ink she saw to it that her letter was true to form. …
Many sentences carry distinct traces of a downtown woman's speech pattern."
(*Something Strange Across the River*, tr. Glenn Anderson, 83-84)

【Seidensticker 訳】
"... airing my books, I had come upon an old letter from a graduate of the Yanagibashi geisha quarter who was being kept in Koume, across the river. In those days a certain formality was required in the writing of letters, and even if she did not know how to spell properly, a woman would remember the forms when she reached for her ink and brush. …
Certain passages, it will be noted, carry traces of the woman's downtown speech."
("A Strange Tale from East of the River," tr. Edward Seidensticker, 133)

どちらの訳も「候文」を「丁寧な言葉」として置き換えており、候文の「手紙に適した書き方」というニュアンスを表していると言えるけれど、「古めかしい」ニュアンスが脱落している。また、どちらの訳も「下町言葉」を"downtown speech"としており、「下町」と"downtown"のずれを感じさせてしまう。[1]

さらに、どちらの訳も"woman's downtown speech"と訳しており、ST にない、一種の性差別が TT に付け加えられていることも指摘しておきたい。さらに、Seidensticker 訳では、"**the** woman's downtown speech"となっており、東京下町で広く用いられている地域言語ではなく、特定の登場人物の描写に結びついてしまっている。

5.2.1.2 古い手紙

前節で取り上げた「古い手紙」の文面は次のとおりである。

『一筆（ひとふで）申上まゐらせ候。その後は御ぶさた致し候て、何とも申わけ無之（これなく）御免下されたく候。私事（わたくしこと）これまでの住居（すまい）誠に手ぜまに付（つき）この中（じゅう）右のところへしき移り候まま御（おん）知らせ申上候。まことにまことに申上かね候へども、少々お目もじの上申上たき事御ざ候間、何とぞ御都合なし下されて、あなた様のよろしき折御立（おたち）より下されたく幾重にも御待（おんまち）申上候。一日も早く御越しのほど、先は御めもじの上にてあららあらかしく。

竹屋の渡しの下にみやこ湯と申す湯屋あり。八百屋でお聞下さい。天気がよろしく候故御都合にて唖々（ああ）さんもお誘ひ合され堀切へ参りたくと存（ぞんじ）候間御しる前からいかがに候や。御たづね申上候。尤（もっとも）この御返事御無用にて候。』
（永井荷風『墨東綺譚』80-81）

[1] ちなみに、林芙美子の短編である「下町（ダウンタウン）」の英訳のタイトルは、Ivan Morris 訳が "Downtown" としているのに対して、Lawrence Rogers 訳は "The Old Part of Town" にしており、「下町／downtown」のずれを回避していると考えられる。

【Anderson 訳】

"'Please do understand that I wished to write you a letter. The duration of my silence has been far too long. I know it to be so and I am sorry. I also wish to inform you that I have moved to new quarters, as the state of my former rooms was in disarray. There is a matter that is difficult for me to give expression to in writing, but I simply must discuss it with you. At a time of your own convenience, do pay me a visit. I shall be waiting. Pardon the brevity of this letter. I am in a terrible hurry. I will tell you all of it when I see you. Please do hurry.

'Down by the ferry you will discover a boathouse. Ask the boy working there. The weather has been so nice lately, you might invite Aa to accompany you as well. It would be wonderful if the three of us could go to Horikiri. Would it be easiest to make the trip in the morning? Pardon all these questions. Respond only if you feel inclined.'" (*Something Strange Across the River*, tr. Glenn Anderson, 83-84)

【Seidensticker 訳】

"'Please be advised that I wish to write you a letter. My silence has been of long duration. I'm very sorry, I really am. I wish you to be advised further that I have moved to new quarters, for the ones but recently mine were a mess. It is a matter difficult to give expression to, but there's something I got to talk over with you. I shall be waiting, at your convenience, whenever you choose to call. You must excuse the brevity of this note. I'm in an awful hurry. I'll give you the whole lowdown when I see you. Make it quick.

'You will come upon a boathouse, by over there where the ferry is. Ask the grocery boy there. The weather these days being of a rare order, you might invite Aa to accompany you. I'd love to go to Horikiri with the both of you. Would the morning hours be convenient? This is the question I would ask of you. No need for an answer if you don't feel like it.'"

("A Strange Tale from East of the River," tr. Edward Seidensticker, 133)

両英訳を比較して、候文に当たる「丁寧な言葉」だと思われる表現（網掛け）、「東京下町言葉」に当たると思われる口語的な表現（二重下線）とも、Seidensticker 訳が多く、訳に工夫の跡が感じられる。ただし、"downtown speech"の訳し方に関して、どちらの訳も特定の地域や街ではなく、広く一般的に使われている（アメリカ）英語の口語的表現を訳に取り入れているため、ST との大きなずれを感じるように思われる。

5.2.2 谷崎潤一郎『細雪』の英訳より

次に東京の上品な山の手言葉だと思われる例を取り上げ、その英訳の仕方をみてみる。

「『［略］失礼でございますけれど、相良さんはどちらにお住まいでいらっしゃいますの』
『北鎌倉なんですの。でもわたくし、去年帰って参りまして、その家に一二箇月おりましただけなんであんすけど』
この『……なんであんすけど』というところが、『ざあます』とも違う一種不思議な云い方で、幸子は自分には真似もできないが［略］」 （谷崎潤一郎『細雪』166）

"'... And where do you live, Mrs. Sagara?'
'North Kamakura. But I came back from abroad only last year, and I've been there only a month or two.'
There are many strange ways of pronouncing 'been,' but Mrs. Sagara had an affectation all her own. Sachiko could not possibly have imitated it." (*The Makioka Sisters,* tr. Edward G. Seidensticker, 95-96)

TT では、ST の「なんであんすけど」を "been" に置き換えている。訳者がこの言葉の二通りの発音/biːn/と/bɪn/ を念頭にこのように訳したと思われるが、相良夫人の発音の仕方に "affectation"（上品ぶったところ）があるという情報を TT に付け加えている。

5.2.3 織田作之助「大阪・大阪」の英訳より

「［略］いくら大阪の善悪についてことごとく論じてみたところで、近松の浄瑠璃の文句にある『なにが善やらあくびやら』と、私はつい白々しい想いにとらわれてしまうのである。ここらが、私の大阪人であるゆえんだろうか。」 （織田作之助「大阪・大阪」）

“And what is more, to propound upon all the virtues and vices of Osaka would just leave me with a feeling of hollowness, like the line in Chikamatsu’s puppet play: ‘Too tiresome to say what is virtue and what is vice.’ This feeling marks me as an Osakan.” (“Osaka, Osaka,” tr. Murakami-Smith)

これは筆者が英訳した織田作之助のエッセイである。近松の浄瑠璃からの引用である「なにが善やらあくびやら」は「悪（あく）／あくび」にかかる言葉遊びである。筆者が訳すにあたり、同じような効果を上げる訳が思いつかなかったため、説明的に訳し、さらには ST に言葉遊びがあったことを示すために次の注を付けた。「なにが善やらあくびやら A play on words that hinges on the similarity of sound of *aku* (evil) and *akubi* (yawn).」したがって、この例は補償が実現できなかった例として挙げる。

5.2.4 織田作之助「アド・バルーン」の英訳より

「腫物の神さんの石切の下の百姓に預けられた［略］その百姓家のおばはん、ものの十日もたたん内にチビスにかかりよった。なんぼ石切さんが腫物の神さんでも、チビスは専門違いや、ハタケは癒せても、チビスの方はハタケ違いや。」 （織田作之助「アド・バルーン」）

この ST は「ハタケ（疥）」（「顔のうぶ毛の生えぎわに、白い粉をふいたような点点の出来る皮膚病」= 新明解国語辞典）と「畑」という同音の単語に拠るダジャレを含む。なお、「チビス（チフス）」（typhus）は「高熱や発疹を伴う細菌感染症の一種」（ウイキペディア「チフス」）、つまり皮膚病ではない重病である。筆者がこの ST を英訳するにあたり、次のように訳してみた。

“...left in the care of a farmer living below the Ishikiri Shrine, whose god is supposed to be good against rashes and boils... the wife of that farmer came down with typhus not 10 days after I arrived. The god of Ishikiri’s good against boils and rashes, but typhus was a rash of a different color.”
(“Ad Balloon,” tr. Murakami-Smith)

この英訳は「畑違い」に似た英語表現 “Horse of a different color”（“a very different thing or issue” = merriam-webster.com）をもじって、“rash of a different color” を採用して ST と似た効果を狙ったものである。

5.2.5 宇野浩二「十軒路地」の英訳より

「［行燈（あんどん）の］正面の一側にだけ、［略］『ちよと一ぱい』と認めてあつた。この『ちよと一ぱい』の読み方について、いつか宇三吉と議論したことがある。『ちよと』はをかしい、『ちょっと』でなければ間違ひだといふのと、『ちよと』といふのは早口に『ちよと』一ぱいといふ意味だらうから、かまはないといふ二つの説だつた。そんなことをいひながら、『ちよと一ぱい』が多分酒のことだらうが、どうしてそんな事を書くのだらう、酒屋にしてはをかしいし、などと考へた程度の私たちは少年だつたのだ。［略］今考へると、これは大阪の所調待合といふやつに違ひなかつた。私たちがもう少し年を取つてゐたなら、色んな男女が出入りをするのを見つけたのに違ひないのだが。」 （宇野浩二「十軒路地」）

この短編には、行燈（「四角な木の枠に紙を張り、中に油受けを置いて火をともしたもの」 = 新明解国語辞典）の側面に「ちよと一ぱい」と書かれているのを少年たちが不思議がって解釈を試みている。筆者が次のように英訳してみた。

“...on the front side [of the lantern] alone ... were the words, ‘A Quik One.’ Usakichi and I once debated the spelling of this ‘Quik One.’ There were two theories: one, that ‘quik’ was wrong, and that it should be spelled ‘quick;’ and the other, that ‘quik’ was a quick way of spelling ‘quick,’ and so it meant an even quicker quick one, and so was all right. Talking along those lines, we thought that ‘A Quik One’ must mean a drink, but wondered why it would say such a thing, because it couldn’t be a liquor shop. As is evident from the contents

of our discussion, we were still just boys. ... I now realize that this house must have been what is known in Osaka as a *machiai*, the equivalent of a house of assignation. If we had been a little older, we probably would have noticed the various men and women coming and going." ("Ten-House Alley," tr. Murakami-Smith)

店の「看板」である「ちょと一ぱい」を "A Quik One" と訳すことは、アメリカなど英語圏で企業名、看板、宣伝などでよく用いられる方法、つまり単語のスペルをわざわざ変えること（"quik," "lite," "thru"など）を TT 読者に思い起こさせると思われる。これは ST になかったニュアンスを余分に付加してしまうともとれるかも知れない。しかし、江戸時代以来発達した日本の近代的資本・消費システムが現代アメリカのそれと近似していることを思い合わせると、行き過ぎた訳し方と必ずしも言い切れないと考えられる。また、英語の俗語 "Quickie" をも TT 読者に連想させ、別の効果も上げていると考えられる。"Quickie" は以下のような意味である。

"something done or made in a hurry: such as
(a) a quickly and usually cheaply produced work (such as a motion picture or book)
(b) a hastily performed act of sexual intercourse" (merriam-webster.com)

上記の（b）の意味を TT 読者に思い起こさせることによって、その店の「正体」である「待合」の看板にもふさわしいとも考えられる。（なお、ST では「待合」が大阪方言として扱われており、その違いを TT にも反映させるために "…a *machiai*, the equivalent of a house of assignation" のようにローマ字で残し、意味の説明を付け加える方法で訳すことにした。これは多重翻訳または複数翻訳(multiple translation)という翻訳手順である。上記 1.3 節で触れた Pym (2016)の分類（表３、表４）参照。

6. 一般化補償（generalized compensation）の可能性

これまで補償の具体例をみてきたが、それぞれの例で、ST で失われた効果が TT の補償で果たして適切に補われたかという問題の検証には至っていない。文学作品における様々な「効果」は読者の感じ方や解釈によって大きく異なり、ST を読んだ SL 読者が享受した効果と TT を読んだ TL 読者のそれとの比較が本論文の範囲を超えているが、翻訳手順分類そのもの同様、補償を翻訳者目線で捉えようとした。補償は翻訳者が用いられる翻訳手順の中でも、翻訳者の自由を増し創造性を引き出す手順であり、上記の具体例を挙げることにより、補償を用いた場合、どのようなことが可能なのかを少しは示すことができたと考えられる。

「補償の可能性」について、最後に Harvey (1995)の「一般化補償」(generalized compensation)の可能性について考えていきたい。

6.1 一般化補償について

上記４節でみたように、「一般化補償」とは、「TT には ST とほぼ同じ数量・質の効果を目的とする文体的工夫が含まれるが、それらが ST の特定の損失個所と結びつかない場合」である。TT のそれぞれの補償個所が ST の損失個所と結びつかないため、特定しにくい場合もあるが、一般化補償と思われる例をいくつか挙げることにする。

6.1.1 Lewis Carroll, Alice's Adventures in Wonderland の日本語訳

補償の具体例（5.1.2.1 節）でみたように、"tortoise/taught us" のダジャレを河合訳では次のように訳している。

「『小さかったころ、』ついに海ガメもどきが［略］続けました。『海の学校に通っていたんだ。先生は年寄りの海ガメだったけど、茶々（ちゃちゃ）と呼ばれていた—』
『どうして海ガメなのに茶々と呼ばれていたの？』アリスはたずねました。
『先生はティーチャだろ。ティーとは茶のことだ。だから茶々じゃないか。』海ガメもどきは怒って言いました。『まったく君はにぶいなあ！』」 （『不思議の国のアリス』河合祥一郎訳、128）

その続きが次のように訳されている。

「『まったく君はにぶいなあ！』
『そんなかんたんな質問をしたりして、はずかしいと思わなきゃいけないよ』と、グリフォンもつけ加えました。それからふたりはだまってすわったまま、かわいそうなアリスをじぃっと見つめたので、アリスは穴があったら入りたい気持ちになりました。ついに、グリフォンが海ガメもどきに『話を進めな、おまえさん！茶々を入れられるたびにこんなことやってたら、日が暮れちゃうよ』と言いました［略］」　（『不思議の国のアリス』河合祥一郎訳、128-129）

「茶々を入れる」はちなみに「人がせっかく話している時に、横合いから口をはさんで、じゃまをする」（新明解国語辞典）という意味だが、訳者が ST の“tortoise/taught us”の言葉遊びを工夫して訳すのみならず、テクスト全体を面白おかしく訳す努力が感じられる。よって、一般化補償の例だと考えられる。また、チャンドラーの例（5.1.1 節参照）同様、テクスト内の結束性を実現する例でもある。

6.1.2 Daniel Keyes, *Flowers for Algernon* の日本語訳

この作品は知的障害のある主人公が自ら書き留めていく日記風の「経過報告」（Progress Reports）からなる。主人公が手術を受け、知能が急速に発達するけれど、手術の効果が一時的なものであり、最後には元の知的障害に戻る。知能の移行が「経過報告」の文体・スペリング・文法に表れており、例えば冒頭（手術前）では以下のような書き方になっている。

“**progris riport 1 martch 3**
Dr Strauss says I shoud rite down what I think and remembir and evrey thing that happins to me from now on. I dont no why but he says its importint so they will see if they can use me.”（Keyes (1966/2004), 1）

スペルミスや文法の間違いはストーリー展開の大切な要素であり、日本語訳でも似た効果を狙い以下のように訳されている。

「けえかほおこく１――３がつ３日
ストラウスはかせわぼくが考えたことや思いだしたことやこれからぼくのまわりでおこたことわぜんぶかいておきなさいといった。なぜだかわからないけれどもそれわ大せつなことでそれでぼくが使えるかどうかわかるのだそうです。」　（キイス(1999/2015), 15）

手術後、知能が目覚ましく伸び、ついには手術を施した精神科医たちのそれを超える。主人公はしかし、以前知的障害があったころ同様、孤独である。この時期に書いた「経過報告」には例えば次の内容が書かれている。

“Then, in a sudden intuition, right outside the Keno Amusement Center, I knew it wasn’t the movies I wanted, but the audiences. I wanted to be with the people around me in the darkness.
The walls between people are thin here, and if I listen quietly, I can hear what is going on.”
（Keyes (1966/2004), 197）

「ところが、キノ娯楽センターから出てきたとき、私が求めていたのは実は映画ではなく、観客なのだということを直観的に悟ったのである。暗闇の中で大勢の人たちにとりかこまれていたかったのだ。
他人とのあいだの壁はここでは薄く、じっと耳をすませば、どんなことが進行しているのかがわかる。」　（キイス(1999/2015), 292）

そして、主人公よりも先に手術を受けたラットのアルジャーノンが奇異な行動が目立つようになり、知能が退化し、ついには死ぬ。そして主人公の知能も失われていき、元の知的障害に戻る。作品は次の言葉で終わる。

“Please if you get a chanse put some flowrs on Algernons grave in the bak yard.”（Keyes (1966/2004), 311）

「どーかついでがあったらうらにわのアルジャーノンのおはかに花束をそなえてやてください。」
（キイス(1999/2015), 449）

日本語訳はいくつかの方法を用いて ST のスペルミス・文法ミス等と似た効果を TT で試みる。つまり漢字をほとんど使わずひらがなを多用する、ひらがなの間違いを取り入れるなどであるが、ST の一つ一つのスペルミス・文法ミスに対応しておらず、一般化補償が用いられている。ストーリー展開とともにひらがな／漢字の割合やひらがなの間違いの回数を調整し、この場合、一般化補償が TT の雰囲気のみならずストーリー展開にも大きく貢献している。

6.2 一般化補償を地域方言の翻訳に用いた例

6.2.1 谷崎潤一郎『細雪』の英訳

谷崎潤一郎が関東大震災後、関西へ移住してから関西の街並み、食べ物、文化とともに関西弁に大きな関心を寄せて、「阪神見聞録」「私の見た大阪及び大阪人」などのエッセイを執筆するのみならず、移住後の多くの小説に関西弁をしゃべる人物を登場させた。よく知られるエピソードとして『卍（まんじ）』の執筆の話がある。阪神間在住の夫人である主人公が自ら話す内容として語られるこの作品は新聞連載当初、谷崎が標準語で書き出したが、途中から女学校の学生二人を雇い、主人公の言葉を全て関西弁に書き直してから新聞に掲載した。しかし、『卍』を含む多くの谷崎作品の英訳では、関西弁が特徴のない平準な英語に訳されている。

しかし、『細雪』の英訳では、訳者のサイデンステッカーが登場人物たちの関西弁を他の登場人物の標準語と区別させることにした。関西弁のセリフはすべて、短縮形（can't, don't, she's, would've 等）を用いず短縮なしの従来の形（cannot, do not, she is, would have 等）で表す方針をもって訳した。例えば、次に引用する会話では、関西人の幸子と関東の夫人である相手との言葉の違いを、サイデンステッカーが以下のように訳している。

「『あなた御病気？どこがお悪いの？』
『黄疸になってんわ。見てごらん、――眼ェ黄色いでしょ』
『ほんと。とても黄色いわね。』
『御気分がお悪いんじゃない？』と、下妻夫人が聞いた。
『えゝ。――でも今日は大分ええ方なんですの。』
『済みませんわね、こんな時にお邪魔に上がって。［略］』　（谷崎潤一郎『細雪』、165）

"'You've been ill? What's the trouble?'
'I have had jaundice. If you look you can see the yellow in my eyes.'
'You're right. They're very yellow.'
'You're still not feeling well?' asked Mrs. Shimozuma.
'Today I am much better.'
'We shouldn't have bothered you.' ..."　(*The Makioka Sisters*, tr. Edward G. Seidensticker, 95)

言うまでもなく、TT の非短縮形が ST の一つ一つの関西弁の要素に対応しているわけではなく、一般化補償となっている。サイデンステッカーはこの翻訳方針を徹底して、『細雪』の阪神間在住の登場人物たちのしゃべる上品な、まったりした関西弁の雰囲気を英訳に反映させようとした。しかし、短縮形の有り無しはそれほど際立つ差異ではないため、説明なしで登場人物の会話を読んだ TT 読者はその違いに気付くかどうかは疑問があると言わざるを得ない。よって、地域方言の翻訳方針として不十分とも考えられる。

6.2.2 川上未映子『乳と卵』の英訳

川上未映子の『乳と卵』の登場人物たちが大阪出身で、大阪弁が三つの位相で見られる。つまり、登場人物たちの会話のセリフ、登場人物の一人である緑子の日記、そして作品の基調を成す主人公の夏子の一人称の語りである。芥川賞受賞の「乳と卵」（2007 年）がのちに改訂・加筆され

て『夏物語』（2019 年）の前半部分として出版され、『夏物語』の英訳が *Breasts and Eggs* として 2020 年に出版された。しかし、英訳の出版に先立ち、Louise Heal Kawai による 2007 年版「乳と卵」の部分訳が 2012 年にネット上に発表された。興味深いことに、Heal Kawai が大阪弁の英訳に英国マンチェスター方言を用いている。訳者が以下に述べているように、大阪とマンチェスター、両都市の住民と方言に共通点を見出している。

"I've long been aware of the many parallels between Mieko Kawakami's home city of Osaka, Japan, and my own hometown, Manchester in the UK. ... The inhabitants of both cities are said to be friendly, down-to-earth, and very outspoken, just as the characters in Breasts and Eggs. And most importantly, the dialect spoken in Osaka and Western Japan is markedly different from that of Tokyo and the East. Often frowned upon as sounding rather rough or unsophisticated, Mancunian (adjective meaning "of Manchester") is to my ears a perfect rendering of Osaka dialect." (Heal Kawai (2012))

次に『乳と卵』の大阪弁が現れる三つの位相からの具体例とそれぞれの英訳をみていく。

【主人公の一人称の語り・登場人物の会話】
「巻子はわたしの姉であり緑子は巻子の娘であるから、緑子はわたしの姪であって、叔母であるわたしは未婚であり、そして緑子の父親である男と巻子は今から十年も前に別れているために、緑子は物心ついてから自分の父親と同居したこともなければ巻子が会わせたという話も聞かぬから、父親の何らいっさいを知らんまま、まあそれがどうということもないけれども、そういうわけでわれわれは今現在おなじ苗字を名のっていて、ふだんは大阪に住むこの母子は、この夏の三日間を巻子の所望で東京のわたしのアパートで過ごすことになったわけであります。
巻子から、今回の上京に関する電話があったのはそもそも一ヶ月くらい前のこと。
『あたし豊胸手術を受けたいねんけども』という内容であった。」　（川上未映子『乳と卵』、11）

2007 年版「乳と卵」からの引用だが、主人公の一人称の語りは大阪弁の要素が少しはみられるものの、「である」「われわれ」等、書き言葉の要素が多く含まれる。巻子のセリフは当然、大阪弁の要素を含む。上記の引用部分を、Heal Kawai 訳では以下のように訳されている。

"Makiko's my older sister and Midoriko's her kid so that makes Midoriko my niece and me her unmarried auntie, and because it's been nearly ten years since Makiko broke up with Midoriko's dad she doesn't remember living with him, and I haven't heard anything about her mum having them meet so she knows sod all about the bloke—but that's by the by—and we all go by the same name now. So Makiko asked and now the two of them are coming up from Osaka in the summer holidays to stop with me in Tokyo for three days.
It was about a month ago Makiko phoned me to say she was coming.
'Natsuko, I'm thinking of getting me boobs done.'"
(Kawakami Mieko (2012), tr. Heal Kawai)

マンチェスター方言の要素を多く含み、書かれたテクストよりも、主人公が声に出して話しかけてくる印象を受ける。なお、2020 年の英訳（Bett & Boyd 訳）がベースにしている『夏物語』は「乳と卵」を改訂・加筆しているため、上記引用部分の前半と後半の間に数ページの叙述が挟まれているが、巻子のセリフが次のようになり、Bett & Boyd 訳では以下のように訳されている。

「『わたし、豊胸手術うけよ思てんねんけども』
宣言のような報告のような、そんな電話が巻子からかかってきたのは、今から三ヶ月くらいまえのこと。」　（川上未映子『夏物語』、47）

"'I've been thinking about getting breast implants.'
It had been three months since Makiko had called me up to make this declaration."
(Kawakami Mieko (2020), tr. Bett & Boyd, 36)

なお、2007 年版「乳と卵」には、大阪の実在の地名「京橋」や、大阪を中心に関西に多くの支店があるスーパー「イズミヤ」が現れるけれど、『夏物語』では「笑橋（しょうばし）」「ミズノヤ」

に改められている。しかし、登場人物の会話や緑子の日記には 2007 年版「乳と卵」同様、大阪弁の要素が多く含まれている。

【緑子の日記】
「お母さんとあまししゃべらず。っていうかまったく、お母さんはなんか豊胸手術、について、毎日調べてて、あたしは見んふりしてるけれど、でも胸、うそもののなんかいれておっきい胸にするんやって、信じられへん、だいたいそれって何のためによ？って何のためにか仕事のために？考えられん。気持ちわるい気持ちわる気持ちわる気持ちわる気持ちわる気持ちわる、テレビでみたし写真もみたけど、手術ざっくり切るのやで。ぐっぐっておしこんでいくのやで。いたいのやで。お母さんはなんもわかってない。あほやわ、あほすぎ、あほすぎ［略］」
（川上未映子『乳と卵』、77）

"Me and Mum don't talk much. Well, I've stopped speaking to her at all. Every day she's researching this breast surgery crap, and I pretend not to be looking, but to put fake stuff in your chest just to make your boobs bigger? I can't get my head around it, what's it for? For her job? I don't get it. PUKE PUKE PUKE PUKE PUKE! I've seen it on the telly, and in photos too, they cut you open. Then they shove this thing in and it's dead painful. Mum doesn't understand anything. She's off her trolley, my Mum, daft, barmy, bonkers, thick as two short planks." (Kawakami Mieko (2012), tr. Heal Kawai)

"Mom and I aren't really talking. Not at all, actually.
… All my mom ever does is research breast implants. I pretend like I'm not looking, but she's too busy thinking about boobs to notice anyway. Is she serious? I mean, why? I can't even begin to understand it. It's gross, I really don't understand. It's so, so, so, so, so, so gross. So gross. I've seen what it looks like. I've seen it on TV and online. It's surgery. They cut right into you. They slit you open so they can stuff you, literally. It hurts. What's wrong with her? What the hell is wrong with her? She's being an idiot, the biggest idiot. …" (Kawakami Mieko (2020), tr. Bett & Boyd, 92-93)

Bett & Boyd 訳がティーンエージャーの書きそうな文体を心掛けているという印象を受けるけれど、アメリカ英語の平準的な言葉になっている。Heal Kawai 訳ではイギリス英語の方言・俗語の要素が多く含まれ、ユーモアのある文体になっている。

大阪弁をマンチェスターという特定の地域の方言に訳す試みは議論が分かれるところであろう。一読者として、筆者は大阪弁の雰囲気を英語に載せることに成功しているように感じるけれど、マンチェスターをよく知るイギリス人などにはイギリスの都市と日本の都市とのギャップが大きすぎて違和感を覚えるかも知れない。しかし、地域方言を一般化補償を用いて訳す可能性を示す例として評価に値すると考えられる。

6.2.3 中場利一『岸和田のカオルちゃん』の英訳

次は日本の地域方言の英語への訳し方のもう一つの方法として、筆者が中場利一の『岸和田のカオルちゃん』の英訳で採択した方法をみてみる。その方法とは、岸和田弁のセリフをいわゆる「四文字語」（卑猥な言葉）を含むアメリカ英語の俗語へ訳すことである。この方法が突飛に思われる上に、「大阪弁は下品、乱暴」という偏ったステレオタイプを助長する弊害もあると批判されるかも知れない。しかし、『岸和田のカオルちゃん』や『岸和田少年愚連隊』の中場利一作品に登場する、岸和田弁を使う少年たちは暴力に明け暮れて、インパクトの強い言葉でしゃべる。作者も登場人物のしゃべる言葉と小説の内容との相乗効果を意識して書いたと思われる。両作品の冒頭で岸和田弁の「汚さ」を強調する叙述がある。

「『もう！何度言ったらわかるの。言葉づかいをもっと良くしなさいと言ってるでしょう』
［略］確か五年生か六年生の頃だったと思う。それまでも何度も何度も言葉がキタナイと注意を受けていた。

毎年、新しい学年になるたびに『ご家庭の方でも、言葉づかいに注意してあげてください』という母への手紙らしきものをもらった。
『そらえらいこっちゃ。明日からおまえ、きれいな言葉しゃべりー』と母は毎年その手紙を読ん

では私に注意をした。
『きれいな言葉てお母（か）ん、どんな言葉な』と母に聞き返すと、『お父さんに聞き』と決まってそう言った。
　その父は『あほやノオーおまえは。そんなもん簡単やんけ、テレビとおんなじ言葉しゃべったらんかい』と言う。」　　（中場利一『岸和田少年愚連隊』、6）

「大阪の中心部から南に向かい、どんどん進んで行くとどんどん言葉がきたなくなっていく。耳をすまして聞いていくとちょうどこの辺がきたない言葉のピークかな、と思える場所がある。
そこが大阪、泉州岸和田である。
［略］岸和田に生まれた私は、周りに荒くれた大人しかいなかったせいか、すくすく荒ぶって育ったのであった。」　　（中場利一『岸和田のカオルちゃん』、5）

　このように、岸和田弁ないしは大阪弁の一面を強調したステレオタイプではあるものの、著者自身が登場人物たちのしゃべる言葉の「汚さ」に言及している。小説には暴力沙汰が数多く含まれていることと考え併せれば、TT でインパクトのある「四文字語」を含むアメリカ英語の俗語を使用することが妥当だという結論に至った。例えば、少年たちがヤクザにケンカを売る場面のセリフを以下のように訳してみた。（TT のキタナイ英語はお許しいただきたい。）

「『これワレ、なにメンチ切ってんじゃい』［略］
『メンチ切ったて……ボクらわしらに言うてんかいや』」
（中場利一『岸和田のカオルちゃん』、6）

"'What you starin' at, motherfucker?' ...
'Starin'…? You talkin' to us, boys?'"
(Nakaba Riichi, *Kaoru-chan of Kishiwada*, tr. Murakami-Smith)

　ST、TT のそれぞれの言葉の「汚さ」の度合い、インパクトなどに違いはあるかも知れないが、一定の効果を狙い、この方法で訳すことにした。TT の俗語や「四文字語」が必ずしも岸和田弁の一つ一つの「汚い言葉」に対応しているとは限らないため、これは「一般化補償」の例である。『細雪』、『乳と卵』の例もそうであるように、地域方言が作品全体に醸し出す雰囲気を、何とか TT にも匂わせようと努めた結果である。

7. むすび

　これまで取り上げてきた具体例からも分かるように、「補償」は ST の効果を TT で再現するために、逆に ST から飛躍して訳す翻訳手順である。補償を用いた際に生じる ST と TT との「ずれ」の弊害、どれほどの「ずれ」が許容範囲内かの議論、さらには「同様の効果」とは何かという問題、翻訳者が恣意的に訳しているのではないかとの疑問など、補償はいろいろの問題点があるのは確かである。文学作品その他言語行為から受け手が受ける効果は受け手の解釈、経験、背景などにより異なる以上、ST の効果と TT の効果が同様であるという保証はない。しかし、どの言語行為もそうであるように、発言者がメッセージを送る（表現し説明する）努力と受け手がそのメッセージを受け取る（理解し解釈する）努力の双方があって初めてコミュニケーションが成功すると考えられる。「補償」を含む翻訳手順はどれも翻訳者が ST から汲み取ったメッセージを何とか TT に表す努力にほかならない。
　これまで挙げた具体例から明らかなように、「補償」は翻訳者の自由を増し創造性を引き出す、つまり翻訳者の主体性を確立させる翻訳手順である。特に「一般化補償」は言葉遊びやユーモアの効果、作品全体の雰囲気や地域方言など、他の翻訳手順では不可能な翻訳を可能にし、機械翻訳がまだまだなしえないことが翻訳者には可能だとアピールできると確信する。ST の個々の語句から飛躍することによって TT を ST 全体に近づけるという逆説的な手法である補償は、フィクションという「作り話」によって「真実」に迫るという文学にふさわしい手法だと言えるかも知れない。

参考文献

《先行研究》

Baker, Mona (2011) *In Other Words: A coursebook on translation*, Second edition. London & New York: Routledge.

Harvey, Keith (1995) "A Descriptive Framework for Compensation," *The Translator*, 1:1, 65-86, DOI: 10.1080/13556509.1995.10798950.

Hasegawa, Yoko (2012) *The Routledge Course in Japanese Translation.* London & New York: Routledge.

Heal Kawai, Louise (2012) "Introduction" to Kawakami Mieko *Breasts and Eggs* (excerpt), tr. Louise Heal Kawai. Words Without Borders (https://wordswithoutborders.org/read/article/2012-08/august-2012-from-breasts-and-eggs-mieko-kawakami-louise-heal-kawai/). Consulted Mar. 13, 2023.

Merriam-Webster Dictionary online (https://www.merriam-webster.com/).

Munday, Jeremy (2012) *Introducing Translation Studies*, Third Edition. London & New York: Routledge.

Pym, Anthony (2004) "Text and Risk in Translation." ResearchGate (https://www.researchgate.net/publication/283363313_Text_and_risk_in_translation). Consulted Mar. 13, 2023.

Pym, Anthony (2010) *Exploring Translation Theories.* London & New York: Routledge.

Pym, Anthony (2016) *Translation Solutions for Many Languages*. London & New York: Bloomsbury.

Venuti, Lawrence (1998) *The Scandals of Translation.* London & New York: Routledge.

稲木昭子・沖田知子 (2015) 『アリスのことば学ー不思議の国のプリズムー』（大阪大学出版会）

ウィキペディア「チフス」（https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%81%E3%83%95%E3%82%B9）

ヴェヌティ、ローレンス (2022) 『翻訳のスキャンダル』（フィルムアート社）

『新明解国語辞典 第四版』 (1992)（三省堂）

ピム、アンソニー (2010)『翻訳理論の探求』（みすず書房）

ベイカー＆サルダーニャ編 (2013)『翻訳研究のキーワード』（研究社）

マンデイ、ジェレミー (2009)『翻訳学入門』（みすず書房）

《文学作品》

Carroll, Lewis (1865/1998) *Alice's Adventures in Wonderland*. London: PenguinBooks.

Chandler, Raymond (1953/1992) *The Long Goodbye.* New York: Vintage Books.

Kawakami Mieko (2012) *Breasts and Eggs* (excerpt), tr. Louise Heal Kawai. Words Without Borders (https://wordswithoutborders.org/read/article/2012-08/august-2012-from-breasts-and-eggs-mieko-kawakami-louise-heal-kawai/). Consulted Mar. 13, 2023.

Kawakami Mieko (2020) *Breasts and Eggs*, tr. Sam Bett and David Boyd. London: Picador.

Keyes, Daniel (1966/2004) *Flowers for Algernon*. Boston & New York: Houghton Mifflin Harcourt.

Nagai Kafu (1965) "A Strange Tale from East of the River," tr. Edward Seidensticker. *A Strange Tale from East of the River and Other Stories.* Boston; Rutland, Vermont & Tokyo: Tuttle.

Nagai Kafu (2013) *Something Strange Across the River*, tr. Glenn Anderson. New York: One Peace Books.

Tanizaki Jun'ichiro (1957) *The Makioka Sisters.* London: Vintage.

宇野浩二 (1925/1993) 「十軒路地」『ふるさと文学館第 32 巻 大阪 1』（ぎょうせい）

織田作之助 (1941/1970) 「大阪・大阪」『織田作之助全集第 8 巻』（講談社）

織田作之助 (1946/1999) 「アド・バルーン」『夫婦善哉』（講談社文芸文庫）

川上未映子 (2008)『乳と卵』（文芸春秋）

川上未映子 (2019/2021)『夏物語』（文春文庫）

キイス、ダニエル (1999/2015)『アルジャーノンに花束を〔新版〕』小尾芙佐訳（早川書房）

キャロル、ルイス (1955/1985) 『ふしぎの国のアリス』田中俊夫訳（岩波少年文庫）

キャロル、ルイス (1987)『不思議の国のアリス』柳瀬尚紀訳（ちくま文庫）

キャロル、ルイス (1994) 『不思議の国のアリス』矢川澄子訳（新潮文庫）

キャロル、ルイス (2010) 『不思議の国のアリス』河合祥一郎訳（角川文庫）

谷崎潤一郎 (1943-1949/1983) 『細雪』（中公文庫）

チャンドラー、レイモンド (1976) 『長いお別れ』清水俊二訳（早川書房）

チャンドラー、レイモンド (2007) 『ロング・グッドバイ』村上春樹訳（早川書房）

チャンドラー、レイモンド (2022) 『長い別れ』田口俊樹訳（創元推理文庫）

永井荷風 (1937/1991) 『墨東綺譚』（岩波文庫）

中場利一 (1994/2005)『岸和田少年愚連隊』（講談社文庫）

中場利一 (1995-1997/2002)『岸和田のカオルちゃん』（講談社文庫）